「日本語能力簡易試験（SPOT）」の得点分布傾向
－中上級向けテストと初級向けテスト－

小林　典子　　フォード丹羽順子　　山元　啓史

要　旨

筆者等の考案した日本語能力簡易試験は、音声テープで文を聞きながら、解答用紙に書いてあるその文の１カ所の空欄に、聞こえた音（ひらがな１字）を書き込む形式のものである。これは約10分程度の時間があれば実施できる客観テストで、採点も単純かつ短時間に処理できるうえ、筑波大学のプレースメントテスト（PT）と相関が高いことから、日本語能力を簡単に測定する方法として、実用化が期待できるものである。証明はこれからの課題であるが、SPOT は言語運用能力（performance）を反映したテストと言えるであろうと考え、このテスト形式を SPOT（Simple Performance-Oriented Test）と呼ぶことにした。

本稿では、難度の高い SPOT（SPOT-Ver. 2）と低い SPOT（SPOT-Ver. 3）が、それぞれ PT とどのような相関を示すか調べた結果を報告する。SPOT-Ver. 2 の得点下位群は PT との相関が低くなり、分布に散らばりを示すのに対して、問題を易しくした SPOT-Ver. 3 では成績下位群も相関が高くなった。しかし、SPOT-Ver. 3 の場合にも、相対的に成績下位群において、PT との相関が低くなるという事実がみられた。従来の PT と、SPOT は日本語能力を異なる方法で測っており、その違いが SPOT 成績下位群に強く影響しているのではないかと考える。

［キーワード］　日本語能力　プレースメントテスト（PT）　SPOT　言語運用能力　短時間単純処理

Distribution of Scores in the Simple Performance-Oriented Test(SPOT): comparison of scores between easy and difficult versions of SPOT

Kobayashi, Noriko　Ford-Niwa, Junko　Yamamoto, Hilofumi

SPOT (Simple Performance-Oriented Test) was developed by the present authors as a simple test of Japanese language ability. Testees are asked to listen to a tape and fill in the blanks on an answer sheet, each with a single hiragana character representing a grammatical item. It takes only 10 minutes to complete and scores of the results are obtained simply and objectively.

This paper compares the scores of the relatively difficult SPOT (Ver. 2) and that of the relatively easy SPOT (Ver. 3) with the Placement Test scores of the University of Tsukuba. In SPOT (Ver. 2), the higher-scoring group shows a high correlation with the PT score, but not the lower-scoring group. SPOT (Ver. 3) is designed to differenciate lower-level students. Although SPOT (Ver. 3) cannot differenciate higher-level students, it succeeds in showing the difference between lower-level testees. However, in both SPOTs, the higher scores show a stronger correlation with the PT than the lower ones. SPOT and PT measure the Japanese language ability in different ways, which seems to make obtaining lower-level testees' scores difficult.

1．はじめに

筆者等が考案した日本語能力簡易試験をSPOT（Simple Performance-Oriented Test）と命名した。このテストは、自然な速度で話される文を聞きながら、文字を目で追い、解答用紙に欠落した1文字を書き込む、という作業を並行して処理できる能力がなければ、得点できないものである。つまり、自然に話される速度で日本語の情報が処理できるレベルに至ってはじめて、得点できるものである。このことから、従来、測定が難しいとされてきた言語運用能力（performance）を反映した測定になっているのではないかと考え、1文の1文字分の 書き込みというテスト解答形式の特徴も含めて、略してSPOTと名付けたわけである。

SPOTは当初、日本語能力の測定を目的として考案されたものではなかった。音声聴取に際して、知っていることは聞き取れるが、知らないことは聞き取りにくいという、認知的側面を実証するために、文法知識の有無と文法項目の音声聴取能力の関係を調べるために、考案したものである（小林他1992)。最初の試作版（SPOT-Ver．1，1991実施）と、従来から筑波大学で使用しているPlacement Test（PT）[1]との相関係数は、0.82（総合得点)、0.81（文法得点)、0.75（聴解得点)、0.69（読解得点)、0.61（漢字）で、SPOTは筑波大学のプレースメントテスト（PT）の文法得点、及び、総合得点と強い相関を示すことが分かった。つまり、音声の聴取に当たっては、その音声部分がどのような文構造の一部に当たっているかが分からなければ、聞き分けられない、ということが明らかにできた。そこで、このSPOTを日本語能力の測定に利用できるのではないかと考え、検討を加えてきた。

最初の試作テストSPOT-Ver．1は目的が異なっていたために、その後日本語能力測定を目的としてSPOT-Ver．2を作成し、実施してきた。しかし、成績下位群について、PTとの相関が低くなることが問題であった。

1994年4月に、問題を易しくしたSPOT-Ver．3を作成し、実施した。本稿では、問題の難易と日本語能力レベルとの関係を見ながら、SPOTの特性と、実用化に向けての問題点を検証する。

2．SPOTの概要

SPOTがどのようなテストであるか、まず簡単に述べておく。テストにあたっては、以下の形式の解答用紙と、その問題文を吹き込んだ音声テープとテープレコーダーが必要である。

テストの解答用紙は次のようなものである。

（問題例）

- あしたはちょっと大事（　）用があって行けないんです。
- 就職した（　）らといって、勉強が終わったというわけじゃないよ。
- だから私はそういう（　）うに思いました。

これは、1文中の文法項目1箇所、ひらがな1文字分をディクテーションするテストで、特徴は

以下の通りである。これを約６０問用意して行っている。

①各問題文は自然な速度で欠落やノイズなしに１文全部が読み上げられる。問題間は２秒程度。
②受験者はこのテープを聞きながら、解答用紙の文を読み、ひらがな１文字をディクテーションする。
③穴埋め箇所は文法項目の１文字分である。
④各問は１文で完結しており、各問題間に文脈の関係はない。
⑤テストのやり方の説明から終了までに要する時間は約10分と短時間である。
⑥採点者はひらがな１字を採点すればよいので、誰にでも採点できる。

SPOT は言語テストとしては今までにない形式で、ユニークなものである。クローズテストに近いが、次の点で異なる。

①機械的な位置による穴埋めではなく、意図的に選んだ文法項目のみを問題とする。
②音声で解答を与えている。
③音声は自然な速度で、次々と流れていくため、受験者は即座に解答することを要求される。
④音声によって、次々と問題を強制的に進めさせるので、１問題当たりの処理時間は均一に制限される。通常の書き込みテストのように途中で時間切れで、やり残すということは起きない。

以上が、SPOT の問題形式の特徴である。

３．テスト結果

３．１　難度の高い SPOT の場合

これまでに同じ形式の異なるテストを３版試作した。最初の２版は、初級文法項目を全体の２／３、中上級項目を残り１／３とした[2)]。文法項目の選出、解答形式の文字の問題、PT との相関、などを分析し、日本語能力の推定に利用可能であることがわかった。

これまでの、研究から次のような点が明らかになっている。

①SPOT 低得点者群では PT と相関が弱くなる。
②解答用紙の漢字の有無は有意な差とならない。つまり、非漢字圏学習者も、漢字圏学習者も、SPOT で採用している程度の漢字語彙はその読みが音声で与えられることも手伝って、問題になっていない。（小林他1994）
③SPOT で得点されている文法項目を、PT の文法得点集団間で、調べた結果、PT の文法得点中位以下のグループでは SPOT で得点できない文法項目が非常に多く、逆に、中位以上のグルー

プになって初めて基礎的な初級文法項目も得点されるようになり、成績が上がるにつれ、SPOT 得点項目が急増していることがわかった。これは PT の文法得点者を上位から25％ずつ4群に分け、その集団内における SPOT 文法項目得点を検討したものである。(フォード他1993)

問題とした文法項目は表1のとおりである。

＜表1＞

SPOT －Ver. 2 の文法項目一覧　（左端の番号は問題番号）

①連体修飾成分

10	コーヒーのおいしい店	ノ（従属節内の主格）
44	外国人のあなたは	ノ（同格）
6	グリーンのスカート	ノ（色の名詞による限定）
12	あの窓のところ	ノ＋トコロ
2	有名な人	ナ形容詞名詞修飾
11	大事な用	ナ形容詞名詞修飾
17	えらそうなこと	ソウナ（様態）＋コト
50	言えないようなこと	ヨウナ（様態）＋コト

②連用修飾成分

≪格助詞≫

60	あそこに立っている人が	ガ（総記）
16	色が変わったら	ガ（従属節内）
9	っていうのを知る	ヲ（対象）（トイウノ＋ヲ）
13	....を曲がる	ヲ（通過点）
3	見に行く	ニ（目的）
54	聞いたんでしょ、彼に	ニ（起点）倒置
4	その中に	ニ（位置）
7	先生にはもう	ニ（着点）
5	となりの人に....てもらう	ニ（授受）
23	茶色に見える	ニ（様態）
65	新聞に出る	ニ（存在）
1	そこで	デ（場所）
20	これでいい	デ（限度）

61　だれといっしょに　　ト（相手）

47　思ったより　　ヨリ（比較）（動詞＋ヨリ）

≪取り立て助詞≫

43　場所はいいけど　　ハ（対比）

15　好きな人でもいるの　　デモ（例示）

30　東京ほど....ない　　ホド（程度）

62　せんたくとかは　　トカ

35　子供になんか　　ニ（能力の主体）＋ナンカ

51　....なんて思う　　ナンテ＋思ウ

≪助詞相当語句≫

58　増えるにしたがって　　ニシタガッテ（助詞相当語句）

27　留学生にとって　　ニトッテ　　（助詞相当語句）

≪疑問詞関連≫

25　何....かと思う　　カ（疑問詞～カ＋ト思ウ）

45　どのように....かが　　カ（疑問詞～カ＋助詞）

64　どこか行かない？　　ドコカ

≪形式名詞≫

33　君のせいで　　セイデ（原因）

39　いまのままで　　ママデ（様態）

59　そういうふうに　　フウニ（様態）

≪従属節≫

19　約束してたのに　　ノニ

53　作ってはみたものの　　モノノ

48　就職したからといって　　カラトイッテ

42　早く行ったって　　タッテ

34　っていえば　　トイエバ（提題）

③用言成分

≪活用≫

8　会えればいい　　可能形＋バ

18　そうじさせられて　　使役受身形

24　そうだと思う　　ダ＋ト思ウ

32　出かけようとしたら　　意向形＋トスル＋タラ

37　もう60だし　　ダ＋シ

28	そのぐらいにして	ニスル
49	終わりそうにない	ソウニナイ（様態）
38	問題でありまして	デアル
31	がんばらなきゃ	ナキャ（ナケレバナラナイ）
32	出かけようとしたら	意向形＋トスル＋タラ
56	どんどん読めちゃいそう	可能形＋テシマウ＋ソウ（様態）

≪補助動詞≫

14	はってある	テアル
41	ひどくなっていく一方だ	テイク
63	乗っててころんだ	テイル
26	忘れてた	テイタ
55	寝ちゃってさ	テシマウのテ形＋サ（終助詞）

≪敬語・待遇表現≫

22	ご連絡する	ゴ～スル（謙譲）
52	手伝っていただけませんか	テイタダケマセンカ

≪その他の表現≫

21	書くことにする	コトニスル
29	わけです	ワケダ
36	とはかぎらない	トハ限ラナイ
40	しないんじゃないの	ンジャナイ
46	何かすべきだ	ベキ
57	やらざるをえない	ザルヲエナイ

＊以上65項目であるが、中に同じ文法機能項目もある。これは初歩的な語彙の場合と、慣用句的な場合とある。フォーマル、インフォーマル、両スピーチスタイルを含んだ、自然な話し言葉が中心になっている。初級文法項目でも前後にいくつかの文法項目が重なって出てくるものが多く、これが難しくしている。

図1は、SPOT-Ver. 2 、1992実施の得点と、通常の PT の総合得点の分布図である。

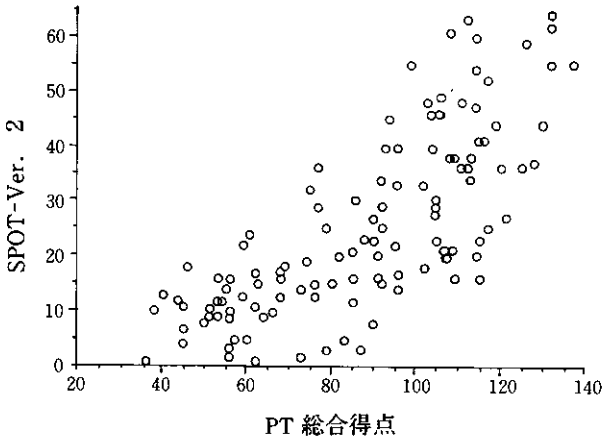

図1．SPOT －Ver. 2 と PT の得点分布

図1は SPOT 得点下位者については、PT との相関が弱くなっていることが分布の様子から見える。

3．2　難度の低い SPOT の場合

SPOT-Ver. 2 は成績下位群の受験者の識別ができていないのではないかということから、成績下位群を識別できるようにと、文法項目を初級項目のみ、スピーチスタイルはフォーマルのみとし、音声もより明瞭にして、難度を低くしたSPOT-Ver. 3 を作成し、1994春に実施した。

＜表2＞

SPOT－Ver. 3 文法項目一覧

①連体修飾成分

4	きれいなの	ノ（準体）
56	おいしそうな料理	イ形容詞＋ソウダ（様態）

②連用修飾成分

≪格助詞≫

11	友だちが作った料理	ガ（従属節内の主体）
24	カメラがほしい	ガ（対象）
7	新聞を読む	ヲ（対象）
16	この道をまっすぐ	ヲ（通過）

13　食堂で食べる　　デ（場所）

49　友だちに....もらう　　ニ（起点）

17　木村先生には　　ニ（着点）＋ハ

18　映画を見に行く　　ニ（目的）＋行ク

35　金曜日までに　　マデニ

≪取り立て助詞≫

20　少ししかない　　シカ～ナイ

37　お茶でも飲む　　デモ（例示）

38　５つも食べた　　数＋モ

≪疑問詞関連≫

1　どれですか　　ドレ

2　何が入っている　　ナニ＋ガ（主格）

12　どこか行く　　ドコカ

14　どこにも....ない　　ドコニモ

19　どこに....か知っている　　カ（疑問詞～カ知ル）

59　来るかどうか知る　　カドウカ

≪従属節≫

22　よくわからないんですが、　　ガ（切り出し）

25　入るまえに　　マエニ

39　値段も安いし、　　イ形容詞＋シ

45　降っているのに、　　ノニ

57　ひまなので　　ナ形容詞　＋　ノデ

5　静かでいい　　ダのテ形

10　学生で、専門は経済　　ダのテ形

21　聞いて、びっくり　　テ形（原因）

55　留学するために　　タメニ（目的）

50　降ったら家にいる　　タラ

51　降っても行く　　テモ

③用言成分

≪活用≫

23　食べましょう　　マショウ

28　母にしかられた　　受身形

31　食べさせた　　使役形

40	帰ろうと思う	意向形＋ト思ウ
52	元気になるだろうと思う	ダロウ＋ト思ウ
54	書けと言われた	命令形＋トイウ
58	読めない	可能形の否定
3	広くない	イ形容詞の否定形
26	広くなりました	イ形容詞＋ナル
27	きれいにして	ナ形容詞＋スル
≪補助動詞≫		
15	読んでおいて	テオク
8	開けてある	テアル
9	閉まっている	テイル（状態）
36	電話をかけてきます	テクル
≪敬語・待遇表現≫		
29	お帰りになりますか	オ～ニナル（尊敬）
30	お持ちしましょうか	オ～スル（謙譲）
42	休ませていただきたい	使役形＋テイタダク
48	送ってくれた	テクレル
≪その他の表現≫		
6	部屋にいます	イル
32	っていう本	トイウ
33	帰ったところ	タトコロ
34	来るはずだ	ハズ
41	働くつもりだ	ツモリ
43	出したほうがいい	ホウガイイ
44	行かなければなりません	ナケレバナラナイ
46	質問してもいい	テモイイ
47	始めてはいけない	テハイケナイ
53	降るそうです	ソウダ（伝聞）
60	話せるようになる	ヨウニ＋ナル

＊以上、60項目を選んだ。いずれも、初級教科書に使われるような基本的な表現で、文法項目が幾重にも重なるような複雑なものは少ない。普通体で示してあるが、実際には全部デス・マス体である。

この結果は図2のような分布となった。問題を易しくした結果、成績上位群には天井効果が見られ、識別されていないが、中位群以下に対しては識別度を増した。

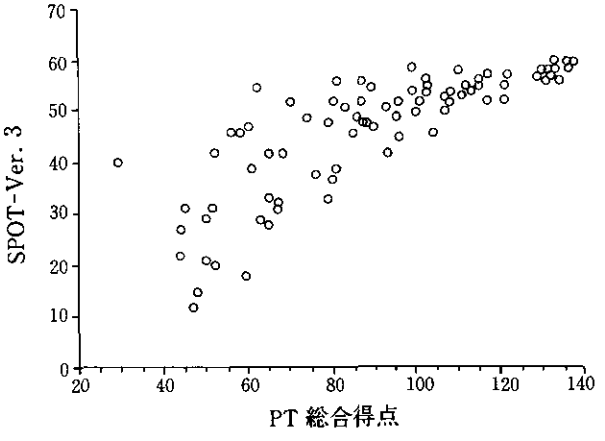

図2．SPOT－Ver. 3 と PT の得点分布

4．考察

より難度の高い SPOT-Ver. 2 とより易しい SPOT－Ver. 3 の得点状況は、表3の通りである。（KUKAN で示されているのは、PT の総合得点、Ver. 2（SCORE）は SPOT-Ver. 2 の各 PT 得点区間における平均得点、92S（N）は Ver. 2 の人数、Ver. 3、94Sについても同じ。）この表3の平均得点を折れ線グラフにしたのが、図3である。破線が Ver. 2（難しい版）、実線が Ver. 3（易しい版）である。

＜表3＞　SPOT Ver. 2 と Ver. 3 の得点分布状況

KUKAN	Ver. 2 (SCORE)	92S (N)	Ver. 3 (SCORE)	94S (N)
20		0	40.00	1
30	6.00	2		0
40	10.83	6	21.40	5
50	10.00	17	31.63	8
60	13.31	13	37.80	10
70	18.80	10	44.67	6
80	16.11	9	49.08	12
90	27.22	18	49.88	8
100	33.61	18	52.45	11
110	39.88	17	55.00	8
120	39.00	5	52.55	4
130	56.00	5	58.09	11
140		0	60.00	1

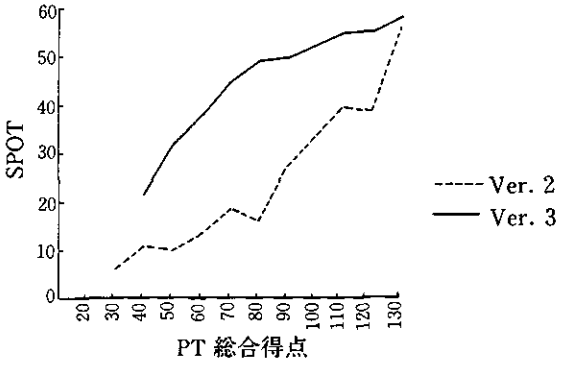

図3

図3、表3からSPOT-Ver. 2では、成績中下位群（SPOT-Ver. 2得点20点前後以下、PT－92得点80点前後以下）について、測定できていないということがわかる。これは

①SPOT-Ver. 2自体のもつ識別度が成績下位者に対して低い
②成績下位者においてはPTとの相関が弱くなる

という、2点の特徴を示している。つまり、成績下位者については、PTで得点する能力とSPOTで得点する能力とは異なるらしいということが推測できる。

一方、SPOT-Ver. 3では、

①成績中上位群（SPOT-Ver. 3得点45点前後以上、PT94得点80点前後以上）については、識別度は低いがPTとの相関はより強くなる
②より低い成績下位群については、よく識別するようになる
③このテストでも、相対的に成績下位群で、PTとのばらつきが目立つ

ということがわかった。そこで、学習者に対しては、SPOT-Ver. 3をまずさせて、これの40点以上の得点者に対して、Ver. 2をさせれば、ほぼ日本語能力の測定は可能となるようで、実際、既にこのような形で、実施を試みている。

今回、比較の基準として採用したPTのような、従来型のテストでは、実際の言語の流れの速度では、言語処理が出来ないような学生でも、熟考した末、正解し、得点できる問題が多くある。そのことを考えれば、SPOTとPTで、成績の異なる受験者がでてくるのも当然であろう。

問題を実際に処理する様子を観察すると、耳で音声をとらえられなかった場合、もう一度文頭から文字を読み直し、考えて、解答しようとするが、その場合、その問題には成功しても、次の問題に間に合わず失敗しているのが見受けられる。また、テープを聞きながらするのは難しいと言って、読みに集中してやるという受験者もいる。この場合、二つ以上の答の可能性がある場合に失敗することになる。

5．おわりに

SPOTの特性については、未知な部分が多い。多様な受験者に対応できるテストの実用化を目指すためには、

①SPOTがなぜ成績中上位群で相関が強いのか、
②SPOTは何を測定しているのか、
③受験者はどのようなプロセスをたどって正解に達しているのか、あるいは、失敗しているのか、

④テープ音声の鮮明度、速度がどのように結果を左右するのか、

⑤問題項目はどのように選んだらよいのか、

など、検証する必要がある。そのためには、異なる受験環境、異なる特性の受験者からのデータを収集し、分析する必要がある。また、これまでは、筑波大学のPTとの比較でしか、分析してきていないが、他の機関での異なるテストで測るとどのようになるのか、見る必要もある。

日本語能力のレベルがSPOTの得点として顕在化するには、文を見たり、聞いたりしたとき、即座に意味や文構造が把握できるレベルにまで、習得が進んでいる必要がある。PTの場合は、ゆっくり考えて、例えば消去法を使いながらでも、正解にたどり着ける。同じ正解でも、それぞれの得点の持つ意味は非常に異なると言えるだろう。知識として辛うじて記憶にあるというレベルから、完全に使いこなせるレベルまで、それぞれのレベルがどのような得点として現れるのか、考えなければならない。

PTは何を測ろうとしているものなのか、また、日本語能力と言った時、どのような能力を指しているのか、という問題に対する解答も迫られることになろう。SPOTが運用するレベルに達している日本語能力を得点化するとしたら、これは教師が普段のコミュニケーションを通して感じる印象評価やインタビューテストなどで得られる評価と近い結果になるかもしれない。運用力を反映したSPOT得点を顕在的な日本語能力と呼ぶなら、運用能力まではまだないが知識としては持っている日本語能力を潜在的日本語能力と呼べるだろう。PTは潜在的な日本語能力の得点も含むと言えるのではないか。

当初は、SPOTの得点とPTの相関が強ければ強いほど、PTの代用になると考え、成績下位群で相関が弱くなることはテスト問題として良くないと、問題視していた。しかし、下位群の相関の弱さは、PTとSPOT各々のテストが測っている能力の種類が異なることを示してると考える方が妥当であろう。

日本語能力を測るというとき、どのレベルの習得（顕在的能力か潜在的能力か）を測ろうとするのか、また測る必要があるのか、さらには日本語能力という場合、その能力は何を指すのか、という問いが投げかけられる。

注

1）筑波大学留学生センターでは、春期と秋期、年2回、日本語のプレースメントテストを実施している。このテストは、文法、聴解、読解、漢字・語彙、の各セクションに分かれており、所要時間は約2時間半である。

2）何を初級と認定するかは、難しい問題である。各文法項目が、日本語教育学会編（1991）の中で初級扱いのものを、初級とみなしたが、現実には、初級項目でも、これが複数重なっていたり、慣用的な表現となると、上級になっても定着していない現実がある。

参考文献

1．小林典子他（1992）「文法項目の音声聴取に関する実証的研究」『日本語教育』78号

2．フォード順子他（1993）「日本語学習者による文法項目の習得に関する一考察」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』8号

3．小林典子他（1994）「日本語能力簡易試験としての「聞きテスト」―解答形式の漢字要因に関する分析―」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』9号

4．日本語教育学会編（1991）『日本語教育機関におけるコース・デザイン』凡人社